Equatorial Biomass Society No.11
July 2013

11

熱帯
バイオマス社会

カクス川中流 Punanのロングハウス（Rumah Ajey）での聞き取り調査
2012年8月（写真：鮫島 弘光）

ビンツル省における流域社会のエスノスケープ

加藤 裕美（京都大学 東南アジア研究所）
鮫島 弘光（京都大学 東南アジア研究所）
祖田 亮次（大阪市立大学 文学研究科）
内堀 基光（放送大学 教養学部）
奥野 克巳（桜美林大学 リベラルアーツ学群）
石川　登　（京都大学 東南アジア研究所）

当プロジェクトでは、ビンツル省のクムナ川、タタウ川流域を中心に研究を行っている。本稿では、これらの流域に暮らす各民族集団の概要をまとめたいと思う。それぞれの民族集団の詳しい状況や、流域（間）社会のエスノスケープについては個別の研究が進められているので、本稿では各民族集団の概況を述べるにとどめたい。社会科学系の皆さんにおいては、以後の調査で得られる知見や情報を暫時加えていくための基礎的なデポジトリーとして、自然科学系の皆さんにおいては、調査地に携帯して参照する民族の「名鑑」として機能すればと考えた次第である。

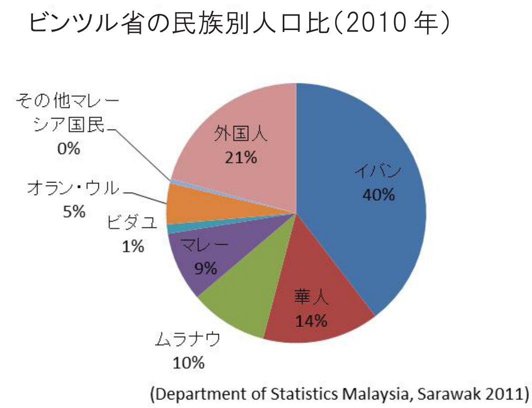


図1: ビンツル省の行政資料による民族別の人口比

	1879	1887	1947
Dayaks 注1	947	755	5276
Tataus	105	100	118
Punans 注2	196	213	197
Lugats	75	112	-
Bukitans	50	157	268
Malays	-	8	426
Chinese	-	30	299

表 1: ビンツルにおける人口推移
注1: DayaksとはイバンDを指す
注2: PunansとはPenanとPunanを指す

写真 1: Metu Ulau 川（出典:Jabatan Residen Bahagian Bintulu）

概況

統計局の資料によると、2010 年、ビンツル省には約 23 万人が居住している。このうち最も多い民族集団がイバン（Iban）で全体の 40% を占めている（図 1）。次いで華人（Chinese）14%、ムラナウ（Melanau）10%、マレー（Malay）9%、

ビダユ（Bidayuh）1% と続く（Department of Statistics Sarawak 2010）。内陸部に居住するカヤン（Kayan）やクニャ（Kenyah）などの民族集団をまとめたオラン・ウル（Orag Ulu）は人口の 5% を占めているに過ぎない。その他、外国人も 21% おり、外国人の居住率も高い地域である。サラワク全体の人口構成比と比較した、ビンツル省の特徴は、外国人、イバン、ムラナウの人口が多く、逆に華人、マレー人の人口が少ないことだ。

歴史的に、クムナ川、タタウ川流域は 19 世紀後半までブルネイ王国の支配下にあり、それ以前は人口の希薄な地域であった（表1）。クムナ川流域には、ヴァイ・スガン（Vaie Segan）、プナン（Penan）などが住んでおり、タタウ川流域にはタタウ（Tatau）が住んでいたとされる。ビンツルという名前は、この地域に住んでいたヴァイ・スガンの言葉で「首級を燻製にする（metu ulau）」という言葉が訛ってできた名前であるという。現在でもスブザウ（Sebezaw）川の支流にビンツルの語源になった Metu Ulau 川が存在する[1]（写真 1）。19 世紀になると、ラジャン川上流部から稜線を越えてカヤン、プゥナン（Punan）、ブカタン（Bekatan）、ルガット（Lugat）などが移住した。その後 1883 年には、クムナ川、タタウ川流域はブルネイ王国よりブルック政府に割譲され、それと同時にスクラン川やサリバス川などサラワク西部からのイバンの移住が進み、交易のために華人も移住してきた（図 2）。

以下では、流域に多く居住する、イバン、カヤン、クニャ、プナンなどの各民族集団について、流域別に簡単に説明す

る（図 3)。なお、以下で述べる情報は、行政に登録されている民族別の村の数であり、実際にその村に住む人々のエスニシティは多様であり、ステレオタイプ的な語りはできないことを付言しておく。

図2: ボルネオ北部の主要河川

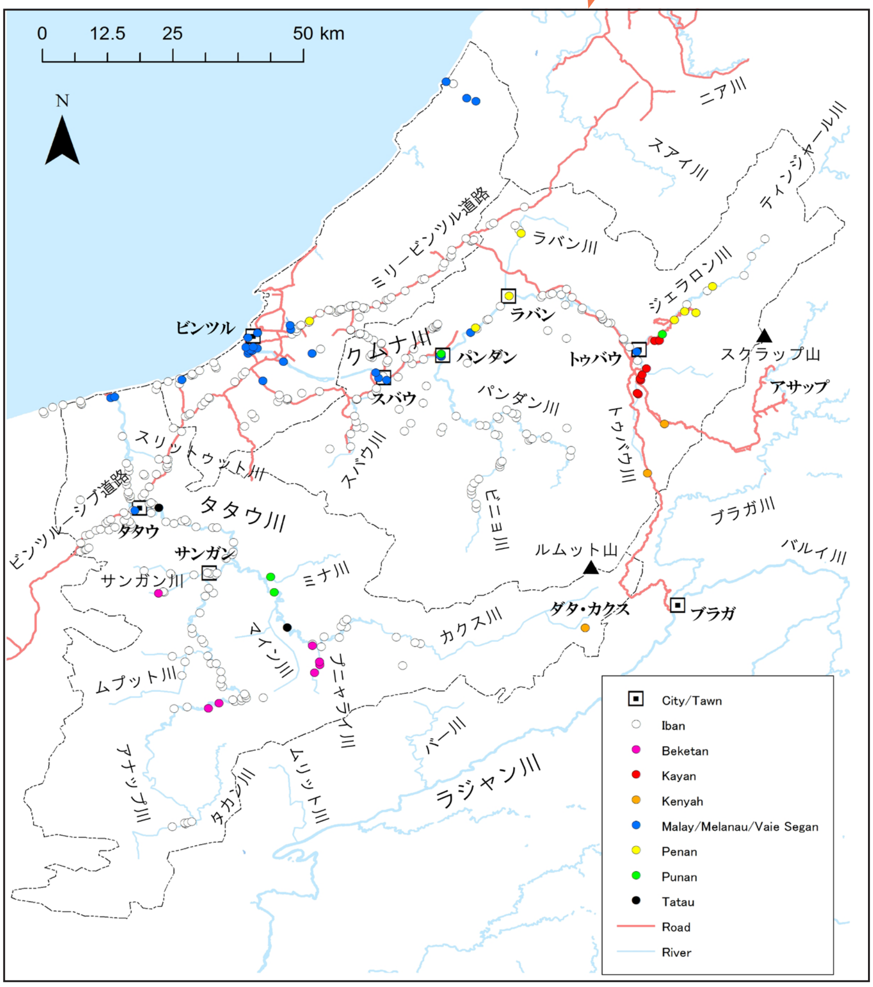


図 3: クムナ川、タタウ川流域における村落分布

イバン（Iban）

イバンは、サラワク州で最も人口の多い民族集団である。サラワク州のみならず、サバ州やブルネイ、インドネシアにも居住する。かつては海岸部で海賊行為を行っていたため、海ダヤク（Sea Dayak）とも呼ばれていた。もともと現在のインドネシア西カリマンタン州のカプアス川流域出身の人々だといわれる（Pringle 1970）。焼畑稲作を主な生業としており、焼畑地の開拓にともなった移動を繰り返してきた。15世紀ごろから現在のサラワク南西部に入り、19世紀初頭までにはルパール川、その支流のスクラン川、サリバス＝ラヤール川 、ラジャン川 などの地域に開拓移動し、その後100年ほどの間にサラワク州全域に広がった（図2）。

ブジャライという慣行により男性は見知らぬ土地に交易等の目的で出かける慣習があった。こうした開拓・交易移動にともない、19世紀から20世紀初頭にかけて盛んに首狩りを繰り返した。首狩りをともなった戦闘では、プゥナンやブカタンなどイバンよりも小さな民族集団をクムナ川やタタウ川へと追いやった。また、プナンやタタウ、ルガットなどは、イバンの侵攻から逃げたり、イバン社会に同化してきたといわれている（Kedit and Chang 2007）。一方、ブカタンはイバンが首狩りに向かう道中の案内役となり、部分的にイバンと同盟的関係を結んだ（内堀 1994）。生業活動としては、イバンは陸稲の栽培とともにゴムの採集、川魚の漁撈、イノシシなどの狩猟や家畜の飼育も行ってきた。現在では、稲作はかつてほど盛んではなく、都市や伐採会社での就労などが多い。また、アブラヤシの小農栽培に従事する人も多い。

かつては多くの人が在来信仰であったが、現在ではキリスト教を信仰する人も多い。毎年6月1日には州政府の定めたガワイという盛大な収穫祭を各ロングハウスでひらき､トゥアクとよばれるもち米から醸造した濁酒が振舞われる。階級のない平等的な双系社会であるといわれており(Freeman 1955)、サラワク・マレー語に近い、イバン語を話す。

行政プロファイルによれば2011年、ビンツル省全体では410の集落（ビンツル地区には229の集落、タタウ地区には181の集落）があり、流域ではトゥバウ川、カクス川上流を除くほぼ全域に居住している（Bintulu District Office 2011; Tatau District Office 2011）。クムナ川、タタウ川流域に暮らすイバンは、19世紀半ばから20世紀後半に至る時期に、サラワク西部の様々な地域から入植し、現地で分裂を繰り返していった。出身地は、サラトックやサリケイ、スクラン、シブ、エンキリリ、サリバス（ラヤール）など多様な地域に及ぶ（図2参照）。クムナ川中流域へのイバンの移住は、1886年にスクラン川の Penghulu Jelani がブルック政府の許可のもとにスバウ川支流に入植をしたのを嚆矢とし、その後も入植が相次いだ（Linggang 2008）。クムナ川上流のジェラロン川では、20世紀前半（ブルック統治期・イギリス統治期）までイバンが入植することは許されていなかったが、1963年のマレーシア連邦成立後に移住が進んでいった。現在、クムナ川流域では、下流から上流のジェラロン川まで、全域にイバンの居住がみられる。

タタウ川における最も早いイバンの入植はブルック期、19世紀半ばと推定される。ムプット川の Rh. Agul や、タタウ－ビンツル道路沿いの Rh. Sagin は、19世紀中ごろにスクラン川で起きたルンタップの乱の際にそれぞれムプット川河口、タタウ川河口に移住してきたと伝えられる。最近では1980年代に移動してきた村もある。タタウ川上流のカクス川では、20世紀前半まで、イバンが住むことは許されていなかったが、1960年代より移住が進んでいった。現在、タタウ川流域においても、下流からアナップ川上流まで、ほぼ全域にイバンが暮らしている（写真2）。こうした村単位での移住のほかに、ジェラロン川上流で見られるように、数世帯で移住してきたイバンがプナンと一緒に住むこともある。

写真 2: アナップ川最上流のイバンのロングハウス

華人（Chinese）

ビンツル省で2番目に多い民族集団である。行政資料によると、華人はビンツル地区に約3万2千人、タタウ地区に2千人ほどが住んでいる。出身地によって客家、福州、潮州などの下位集団に分けられる。華人のビンツル省への移入19世紀半ばとされ（Liggang 2008）、タタウの街にもブルネイ時代から華人が住んでいたと言われている。かつては、上流部に住む先住民との林産物交易の担い手として活躍した。現在では、都市部で企業や商店を経営するなど様々なビジネスを展開している。現在、ビンツルで木材・プランテーション関連ビジネスを独占している華人は、シブ

から移住してきた福州華人である。福州華人は、クムナ流域では、1920 年代にブルック政府の政策のもとでスバウにゴムと水稲耕作のために入植したが、いちはやく鉄木の製材やアタップ（鉄木の屋根材）の取引に参入している。トゥバウやサンガンなど上流部の小さなバザールにも居住しており、こういった地域においては先住民との間の経済活動や婚姻、養子縁組等が盛んである(写真 3)。これらのバザールでのダマール、ジュルトン、ロタンなどの森林産物の交易は主に潮州華人によって行われた。両親にこれらの華人と先住民を共に持つ、いわゆる「混血華人」も多く存在する。

写真 3: トゥバウのバザールで笠を編む華人男性とその妻（イバン）男性の弟はカヤンと結婚したり、プナンの養子になっている

カヤン (Kayan)

カヤンは、クムナ川上流のトゥバウ周辺とトゥバウ川流域に暮らしている。この地域以外にも、バラム川、バルイ川上流、インドネシアの東カリマンタン州に多く居住する。1920 年代まで各地でイバンと激しい戦闘を繰り広げた人々である。イバンと同じく焼畑稲作を主な生業としてきており、漁撈や狩猟、ゴムの採液、コショウ栽培なども行ってきた。トゥバウ周辺のカヤンは、かつてはブラガ川のプナンとも森林産物の交易をおこなっていた [2]。現在では多くが都市や伐採会社で就労し、ロングハウスに暮らす若者は少ない。もともと在来信仰であったが 20 世紀半ばにブンガン教 [3] を信仰するようになり、現在ではほとんどがキリスト教を信仰する。カヤンはイバンと異なり階級制のある社会であると言われている（Rousseau 1990）。世襲制の首長層（maren）のほか、平民層（panyin）、従者層（dipen）に分けられるが、現在では従者層は認められていない。首長層出身の者は教育程度も高く、ビジネスを手掛ける人や、最近では広大なアブラヤシ園をひらく人もいる（写真 4）。

ビンツル省では、トゥバウ周辺にのみカヤンの村（ロングハウス）があり、タタウ川流域にはない。ジェラロン川下流に 2 村とトゥバウ川中下流域に 6 村あり、8 村での人口は約 1,500 人である (図 3 参照)。これらのカヤンの故地は、東カリマンタンのカヤン川であり、そこから稜線を越えてウスン・アパウに移住してきたと言われる。その後、1780 年ごろにはそこからさらにバルイ川に移住してきた（Cramb 1979）。そして、19 世紀初頭には、戦闘を避け、肥沃な土地を求めてバルイ川からトゥバウ川へ移住してきたと考えられている（Cramb 1979, Rousseau 1990）。バルイ川では Uma Juman という一つ村であったが、トゥバウに来てから 5 つに分かれた。Uma Juman、Uma Awai、Uma Paku、Uma San、Uma Tevo’ である [4]。トゥバウに移住してきた当時、クムナ川にはプナンが住んでいたが、多くのプナンはその後ラバン川、ティンジャール川、バラム川へ逃げて行ったと伝えられる [5]。トゥバウに住み始めてからは、カヤンはブルネイのスルタンが税金を徴収するのに反対して、ブルネイ軍に反乱したとされる。

写真 4: 広大なアブラヤシ園をひらく首長層のカヤン

クニャ (Kenyah)

クニャは、クムナ川支流のトゥバウ川上流とタタウ川支流のカクス川上流に暮らす民族である（図 3）。カヤンと文化的には近いが言語は大きく異なる。レポ・タウやバダンなど、40 以上の下位グループが存在する。東カリマンタンのイワン川出身であるといわれており、数世紀前にサラワクに移動してきた（図 2）。イバンやカヤンと同じく焼畑稲作のほか、漁撈、狩猟、商品作物の栽培なども行ってきた。カヤンと同じく、この地域以外にバラム川、バルイ川上流部、インドネシア東カリマンタンにも多く住んでおり、首長、貴族層などの階層制のある社会である（Rousseau 1990）。

クムナ川流域ではトゥバウ川上流に 4 村、タタウ川流域ではカクス川上流に 6 村ある。ビンツル省全体では、10 村、約 2,500 人が暮らしており、いずれも、ラジャン川上流から

移動してきた人々である。トゥバウ川にクニャが移住してきたのは1960年代であるという。ブラガ川のロン・バンガンからトゥバウ川に移住してきた。かつて、このブラガ川のクニャの村やトゥバウ川上流のクニャの村は、トゥバウとブラガの稜線を越えた往来の経由地であった。カクス川にクニャが移住してきたのは、それよりも遅く1985年である。もともと1960年代にインドネシアから、バルイ川上流のロン・ブサンに移住した人々が、1976年にブラガ下流のロン・ドゥンガンに移住した。そこから一部の人が、カクス川上流のダタ・カクスに移住してできた村である。この時、政府は1,284haの土地をクニャに用意し、一斉にICカードを作らせたという[6]。その後4～5つのロングハウスに分かれ、現在では6つのロングハウスにそれぞれ30～40戸ずつ住んでいる。

プゥナン（Punan）

プゥナンは、下記にあるプナン（Penan）とは、言語的にも文化的にも異なる民族集団である。プナンが狩猟採集民であったのに対し、プゥナンは300～400年前から焼畑をおこなっていたといわれている（Nicolaison 1976）。プゥナンは西カリマンタンのマンダイツ出身であると言われ（Nicolaisen 1976）、焼畑稲作を中心にキャッサバやタロ、サトウキビなどを育て、狩猟や漁労もしていた。階層社会であり、首長層（lajar）、平民層（panyin）、従者層（lipien）に分けられる（Nicolaisen 1976）。なお従者層は現在では存在しない。ブサビ besavik といわれる在来宗教を信仰していであったが、後にブンガン教を取り入れ、現在では多くの人がキリスト教を信仰している。埋葬方法は独特で、首長層の人はクリリンと呼ばれる彫刻の施された木柱に遺体を収められた。

プゥナンはクムナ川流域では、パンダンに1村、ジェラロン川に1村、タタウ川流域では、カクス川中流に2村、計4村、約1,400人が暮らしている（写真5）。カクス川のプゥナンは1820年代にバー川から移住していったグループであると言われる（Nicolaisen 1976）。当時は、カヤンがウスン・アパウからバルイ川に移住してきた時期であり、プゥナンに対してたびたび首狩りをおこなっていた。このような政治的不安や闘争を避けてプゥナンはカクスに移住してきたと伝えられる（Sandin 1970, Nicolaisen 1976）。当時タタウ川流域にはタタウしか住んでいなかったが、タタウの女性とプゥナンのリーダーが婚姻関係をもって住み始めるようになった（Sandin 1970）。つまり、カクスにあるプゥナンのロングハウスの一つは元々タタウのロングハウスであった。今でもカクス一帯は政治的にはプゥナンが優勢である（Sandin 1970）。

パンダンに住むグループも同じころにバー川からラバンに移住してきた人々である。移住当時、クムナ川流域には、プナンやヴァイ・スガンしかいなかったという[7]。ラバンに住んでいたときにスガンの女性と結婚し、パンダンに移住するようになったとのことである。

また、ジェラロン川にすむプゥナンについて、Nicolaisenは、バー川に住んでいた人たちがブルック期にイバンの首狩りから逃げて移住してできた村であるという（Nicolaisen 1976）。一方Crambは、パンダンに住んでいた人々が森林産物を求めて徐々に移住してできた村であるとしている（Cramb 1979）。プゥナンがジェラロンに来たときには、すでにプナン、カヤンがジェラロン川流域に居住していたが、イバンはまだいなかった。そのため、プゥナンはカヤンに許可を求めてジェラロンに住むようになったと伝えられる（Cramb 1979）。流域間でのプゥナンどうしの交流は現在でも盛んで、姻戚関係も多い。

写真5: カクス川にあるプゥナンのロングハウス

ブカタン（Bekatan）

イバンなどからはブキタン（Bukitan）と呼ばれることもある。彼ら自身はブカタンと呼ばれることをより好む。ブカタンは、タタウ川上流のアナップ川中流に3村、プニャライ川に5村があり、8村での人口は、約1,200人となっている（図3）。ブカタンはもともと狩猟採集民でありサゴヤシを主食としていたが、プナンと比較してより早く19世紀末には焼畑稲作をおこなっていた（King 1975）。ブカタンも階層制のある社会であり、首長層（marin）、平民層（panyen）、従者層（setengah linou）、奴隷層（areh）[8]に分けられる（Kedit and Chang 2007）。現在では多くの人がキリスト教を信仰しているがイバンのようにガワイの祭りをする人もいる。

もともと西カリマンタンのマンダイ川に住んでいたが、カプ

アス川上流のパリン Palin 川を経由してサラワクに入り、長くバタン・アイ周辺に住んでいた（Sandin 1967）。その後、イバンが首狩りをともなった開拓移動をしてきたため、一部はイバンに同化し、一部はイバンと戦って奴隷になり、また一部はカティバスやカノウィット川、ガット川やバレー川などより遠い地域に逃げて行った（Sandin 1968）。

ブカタンは、西カリマンタンからサラワクへ入った経路の違いにより、4 グループに分かれる。Bekatan Malong、Bekatan Sut、Bekatan Kanyau、Bekatan Ngemah[9] である。現在、アナップ川に住むブカタンは Bekatan Malong と Bekatan Sut、カクス川に住むのは Bekatan Malong の系統であるといわれる（Sandin 1968）。

現在タタウ川に住む 8 村のブカタンの移住の経路はさまざまである。サンガンに住むブカタンはサリバスからオヤ、ムカー、バリンギアンを経由して、タタウ川の下流から入ってきたと伝えられる（Cramb 1979）。また、アナップ川流域に住むブカタンは、19 世紀半ば以前に、ラジャン川からムリット川を経由し稜線を超えて移動してきたと言われる[10]。タタウ川にイバンが移住してくる前、ブカタンはタタウ川本流に住んでいた。しかし、イバンが移住してきてからは、イバンに同化する人もおり、同化しない人々は、より支流のサンガン川やプニャライ川へ移動して行ったと伝えられる（Sandin 1967, 1968）。また、ブカタンがプニャライ川に移住する前、プニャライ川にはタタウが住んでいたが、タタウは超自然的現象（祟り）を恐れて、プニャライを去ってタタウ川下流に移住し、そこにアナップ川から移住してきたブカタンがプゥナンに許可を求めて住むようになった[11]。一方タカン川に残ったブカタンもブルック期に下流に住むようブルック政府から促され、アナップ川中流に降りてきた（写真 6）。かつてはイリペナッツやラタンを採集してタタウに売りに行っていた。現在でも村での在村率が比較的高く、稲作をする人もまだ多い。

写真 6: ブカタンのロングハウスでの共食の様子

プナン（Penan）

プナンは、クムナ川に最も早くから住んでいた民族集団の一つである。現在、クムナ川中流、ラバン川上流、ジェラロン川、ミリ－ビンツル道路沿いに住んでいる（写真7）。この地域以外には、バラム川上流やラジャン川上流、インドネシアの東カリマンタン州、西カリマンタン州、ブルネイに多く住んでいる（Martin 1992; Sercombe 1996）。もともと狩猟採集民であり、森の中を遊動しつつ様々な動物を狩猟して暮らしていた。先行研究によると、クムナ川やジェラロン川に住むプナンは 1830 年から 1880 年頃にはすでに定住し、農業を行っていたと伝えられる（Needham 1965、Cramb 1979）。従来、在来信仰であったが、現在ではキリスト教を信仰する人が多く、イスラム教に改宗する人もいる。またイバンと混住しているプナンの村ではガワイの祭りをすることもある（写真 7）。

沿岸部に住むプナンは早くから定住し、ムスリム化するなど他民族の影響を多分に受けている（Cramb 1979）。ジェラロン川に住むプナン以外はムスリムが多く、プナン・ムスリムと呼ばれている。ミリ－ビンツル道路沿いにはプナン・ムスリムが 2 村、500 人あまりが居住している（写真 8）。ラバン川河口にある Kampung Labang, Sebauh や、ラバン川下流の Kampung Sebubun, Labang、クムナ川中流にある Kampung Maskat にも、ムスリム化したプナンがいるという。ムスリム化したプナンの村ではマレーやヴァイ・スガンとの婚姻関係が多く、スガン語が話されることも多い。

ジェラロン川流域には現在 4 村、約 400 人が住んでいる。ジェラロン川に住むプナンは、ウスン・アパウから移動してきたプナンの子孫であると伝えられている（Needham 1965）。またその一部は、かつてはブキット・スクラップにある洞窟の中に住んでいたという[12]。他の民族においても

写真 7 ガワイの供え物をするジェラロンのプナン

いえるが、他民族との婚姻関係が多く、行政上はプナンと登録されていても、話される言語はイバンであることも多い。とくにジェラロン川流域のプナンの村においてはイバンとの婚姻関係が多くみられる。先行研究では、こうした村では、外見上はイバンとの区別は付きにくく、プナンとしてのアイデンティティは徐々になくなっていくだろうと述べられている（Cramb 1979）。しかし、現在、村によっては逆に状況に応じてプナン性を強調することさえあるという（祖田・石川 2013）。一方ラバン川上流のプナンはこれとは系統が異なり、かつてはラバン川の源流部の洞窟に住んでおり、次第に下流に移住してきたと伝えられる。このグループは歴史的にはスアイ川のプナンとの交流が深かった。

写真 8: プナン・ムスリムの村

マレー（Malay）、ムラナウ（Melanau）

マレーはビンツル省で 3 番目に多い民族集団もしくは範疇である。イスラム教を信仰しており、ビンツル地区に 19,000 人、タタウ地区に 1,600 人が居住している。ただしサラワクにおいては「マレー」という民族範疇は可塑的で、ムラナウやプナンなどであってもイスラム教に改宗すればマレーとみなされることも多い。ビンツル地区には沿岸部や都市部に 33 のマレー / ムラナウの集落があり、タタウ地区には 3 つのムラナウ集落と 2 つのマレー集落がある。

ムラナウはサラワクに最も早くから住んでいた民族の一つで、イバンやカヤンが移住する前からこの地域に住んでいた。早くて 16 世紀にはラジャン川中流からビンツルなどの沿岸部に移動して住んでいたという（Morris 1978）。現在では沿岸部のムカーやダラットに多く住んでいる。プゥナンやブカタンに近似するグループであるといわれており、言語的にもこれらの言語に類似する（Pringle 1970, Metcalf 1976）。もともと在来信仰であったが現在 7 割ほどがイスラム教を信仰し、2 割ほどがキリスト教を信仰している。後述のヴァイ・スガンをそのサブグループ（Melanau Vaie）とすることも多く、定義が難しい。

ヴァイ・スガン（Vaie Segan）

Vaee や Baee、Segaan とも表記される。またムラユ・ビンツルやムラナウ・ヴァイ、オラン・ビンツル、ヴァイ、スガアンとも呼ばれる。クムナ川下流に住み、タタウ語に近い独自の言語を持つ。ヴァイ・スガン語は、ビンツルの街では共通語として使われているという。現在、ムラナウやマレー、その他の様々な民族との婚姻が多く、イスラム教徒も多い。ジェラロン川流域では、「ムラユ（マレー）」と呼ばれることもある。

口頭伝承によるとヴァイ・スガンはブキット・ルムットというところで長らくサゴヤシなどを主食とし狩猟採集をしていた。ブキット・ルムットはブラガの町の北西 15km、カクス川とパンダン川の分水嶺に位置する（図2）。その後川を下ってきてビニョ川周辺でも遊動生活をしていた。その後クムナ川沿いを遊動しつつ川を下り、最終的にはクムナ川の河口に近い、スガン川に長らく定着したということである。1879 年のサラワク・ガゼットによると、スガンは長らく海で漁労をして生活していた人々であり、しばしば海賊に攻撃され、焼き討ち、殺害、捕虜となる被害を受けていたとある(Sarawak Gazette 1879: 38)。ビンツルが 1861 年 8 月 11 日にブルネイ王からジェームス・ブルックに割譲される以前、ビンツルにはヴァイ・スガンやブルネイのマレー人が住んでいた。その後、1930 年代よりメノウを売りに来たアラブ人の宣教集団との交流によって少しずつムスリムに改宗して行ったという。こうしたアラブ人やブルネイのマレー人と婚姻関係を結ぶことによりムスリム化も進んでいった[13]。現在、ビンツルの他に、パンダンやラバン、スバウにも多く住んでいる[14]。

ビンツルの街の上流にある Kampung Baru、その対岸の Kampung Sebuan Kecil、Kampung Jepak などはヴァイ・スガンの村である。トゥバウの対岸の Kampung Melayu Tubau にはヴァイ・スガンの村があったが、現在ではほとんどがビンツルに移住してしまっている。わずかに残っている数世帯も別の多様な民族が入りこんでいる状況で、行政資料上は 7 戸存在していることになっているが、すでにヴァイ・スガンの常住者はいないと考えてよい。トゥバウより下流にもいくつか、ヴァイ・スガンが関係する集落がある。そのうちの一つ、Kampung Pandan, Sebauh 村は、パンダンの町よりも少し上流のクムナ川本流左岸に位置している。集落は 74 戸からなり、マレーが中心でヴァイ・スガンも数世帯混在しているという。このほか、スバウの町の近くには、Kampung Dulu（28 戸）、Kampung Hilir（54 戸）という 2 つの集落があり、いずれもマレーとヴァイ・スガンが混在

している。この2つの集落をまとめて、Kampung Sebauhと呼ぶこともある。

トゥバウよりも上流では、プナンのロングハウスとされているRh.Resaにおよそ7世帯にヴァイ・スガンが婚入しており、この村ではヴァイ・スガン語が共通語として使われている。ブルック期には首狩りが激化しトゥバウのカヤンとラバン（スガン）の間で平和交渉をしたこともあった。カヤンがあまりにも首狩りをして領域を拡大しすぎたため、ラバン（スガン）の首長であるOyong Tijaという女性がAbang Taliという行政官に助けを求めてカヤン首長のMering Batoとの間で交渉がおこなわれた。これによってカヤンはトゥバウ川とジェラロン川の合流点より下流に住んではならず、スガンはラバン川とクムナ川の合流点より上流に住んではならなくなったという[15]。

写真9: ヴァイ･スガンの人が住むビンツル町上流のカンポン･バル

タタウ（Tatau）

タタウ川に最も古くから暮らしていた民族集団である。全人口は不明である。もともと6つのグループに分かれていたが、現在人数は少なく、イバンやプゥナンと混住し、ほぼすべてが他民族との婚姻関係を持っている。ムラナウ語に近い、独自のタタウ語を話す人々である（Nicolaisen 1977)。キリスト教を信仰するが、イバンの在来信仰に近い信仰をおこなっている。もともと狩猟採集民であったが、プナンよりも早くから焼畑農耕をおこなっていたと伝えられる（Sandin 1970)。

現在、タタウの街から少し上流のイバンのロングハウスに住むほか（写真10)、中流域ではRh. Sylversterがタタウの集落ということになっている。しかし、実際にはどちらもタタウとイバンの混成集落となっている。その他、ミナ川のプゥナンのロングハウスや、アナップ川、プニャライ川のブカタンのロングハウスにも混住している。かつては人口が多く、カクス川上流のプニャライ川やアナップ上流のタカン川に集落を作っていた。しかし、プゥナンやブカタンが移住するはるか前に下流に移住していった。イバンやブカタンが首狩りをしていた時は、遠くの森の中に逃げて住んだこともあるという。

タタウの口頭伝承によると、数世代前にプニャライ川でイチジク（kayu kara）の実を立って食べている大蛇を吹き矢で吹いてしまい、その肉を食べた祟りでほぼ絶滅してしまったという。また、それよりもはるか以前、タタウ川河口付近に住んでいた頃に、イノシシほどの大きさのイモムシを焼いて食べたために、その後生まれてくる子供たちが乳幼児期に死んでしまい、タタウの人口が減ってしまったとも伝えられる。これ以外に、マイン川やスリトゥット川で天然痘が流行し、多くの人が死んだともいわれる。その後、残った兄弟姉妹がたがいに結婚しあって子孫を増やしていったという。現在は、プゥナン、ブカタン、イバンとの婚姻関係が多い。

タタウ川のあちこちにはタタウが建てたクリリンという墓がある。タタウ川の下流に19世紀末に建てられた6つのクリリンと2つのサロン（いずれも墓）があったが洪水の時に倒れてしまったという。そのほかタタウ川の中流、アナップ川の上流、プニャライ川など、流域のいたるところにタタウの墓があった。しかし、現在ではその多くが水没している[16]。

写真10: タタウの村の村長家が所有する銅鑼の数々

ルガット（Lugat）

この地域で最小の民族集団である。シハン語に近いルガット語を話すが、現在ルガット語を話すのは数世帯しかいない。独立したロングハウスは持たず、いずれも華人やタタウ、ブカタンなどと混住している。昔から人口の少ない民族であった。タタウの旧街に数世帯が住んでおり、すべて華人と婚姻関係を持っている。ツバメ巣の養殖や加工、

ツバメハウスの建設などをおこなっている。カクス川中流のプゥナンのロングハウスにもタタウ（とプゥナン）と婚姻関係のあるルガットが住んでおり、またサンガン川のブカタンのロングハウスにもルガットの子孫が住んでいる。

史料によるとルガットはバレー川のガット川出身の狩猟採集民であった（Low 1882, Brooke 1907, Freeman 1970）。19 紀末にはラジャン川中流にてシハンやブカタンなどと共に住んでおり（Low 1882）、その後、タタウ川にも住むようになったが、20 世紀初頭には依然としてタタウ川とラジャン川を行ったり来たりしていた（Owen 1905）。

タタウの口頭伝承によると、ルガットはカクス川源流部にあるブキット・ルムットにある洞窟の中で長らく暮らしていたという。鍋などは持たず、かつては土の中で蒸し調理をする方法を用いてきたと伝えられる。その後タタウの勧めで洞窟から出てきて、タタウと混住するようになったという[17]。ルガットの口頭伝承によると、アナップ川上流では、カウィットが率いてクラガン・カウィットに住んでいた。カウィットの子供の一人はブカタンと結婚し、もう一人はタタウと結婚した。今タタウ旧街に住んでいるルガットは後者の子孫である[18]。少数民族であるが子供たちもルガット語をよく話す。

写真 11: タタウの町近くに住むルガットの女性

流域間のエスノヒストリー

本稿では民族集団ごとの概況について述べてきたが、現在流域社会で見られるエスノスケープは人々の流域を越えた移動によって形成されたきた。ここではクムナ川流域とタタウ川流域における人々の流域間移動の歴史をまとめたい。クムナ川では、古くヴァイ・スガンやプナンがクムナ川河口からジェラロン川上流に至る広い範囲を移動しながら住んでいた。ジェラロン川に住むプナンの Rh. Jelaihi の祖先達は、ジェラロン川とクムナ川河口を結ぶきわめて広範な流域にキャンプをつくり、自分たちの土地として認識していたようである。その後カヤンは、バルイ川よりトゥバウに移住し、また華人は河口より徐々に内陸に住み着くようになった。さらに、プゥナンがラジャン川中流、もしくはパンダンから移住してきた。そして後にイバンがサラワク西部の様々な地域から異なる時代にわたって入植するようになり、クニャがブラガ川から移り住んだ。人々の移動の歴史をたどると、ラジャン川、バルイ川、ブラガ川そしてサラワク西部の様々な流域から移ってきた人々が結果的に現在一つの流域を構成する形となっている。

タタウ川でも同様に、古くはタタウが住んでおり、19 世紀初めにプゥナン、後にブカタン、19 世紀後半に華人、ルガットが移り住むようになり、イバンが入植してきた。最も新しくは、1980 年代にクニャが人口増加による土地不足によってバルイ川より移住した。歴史的にみると、ラジャン川、バルイ川など、いずれも近隣の流域からやってきた人々によって、現在のエスノスケープは構成されている。

人々がクムナ川やタタウ川流域に住み始めるようになった背景には、近隣の流域で起こった様々な出来事が起因している。例えば、1820 年代にラジャン川よりタタウ川に移住したプゥナンは、カヤンがバルイ川に流入してきたため、政治的不安定や闘争を避けて移住するようになった。また、カヤンは 19 世紀に民族闘争を避けてバルイ川からクムナ川に移住してきた。同様に、ラジャン川に住んでいたブカタンは、19 世紀にイバンの首狩りを避けてタタウ川に移住してきたという。そして、イバン自身はルンタップの乱を含む、様々な政治的要因や、新しい土地を求めた結果サラワク西部より入植してきた。

注目すべきは、こうして流入してきたイバンやカヤン、ブカタンなどによって、より古くからクムナ川やタタウ川に住んでいたプナンやタタウなどの民族は、さらに上流部、下流部、他流域へと移動していったことである。例えば、クムナ川流域に住んでいたプナンのグループは、カヤンとの戦闘を避けて、ティンジャール川へ移っていったといわれる。また、一時クムナ川流域に住んでいたイバンが、後にさらに東部へ移動していった例もある。

移動の背景だけではなく、人々の移住の形態もさまざまである。イバンやカヤン、クニャのように複数世帯がまとまって大規模に移住してくる場合もあるが、プゥナンのように個人が流域を超えて移動、往来をおこなった結果、歴史が経過するとともに人口が増え村落を形成し村落が分裂していくことも多かった。現在の流域社会のエスノスケープは、

このようなさまざまな背景を持った個々人の移動の歴史が交差、連鎖した結果である。

流域間の関係でいうと、タタウ川はラジャン川中流との往来が盛んであり、流域間の移動ルートも多く存在する。実際、タタウ川上流に住むイバンは、ラジャン川流域にあるカピットの町への往来が盛んである。現在でも、タタウ川上流に暮らす子供たちはラジャン川流域の小学校やカピットの町の中学校に通っている[20]。一方クムナ川も、やはりラジャン川上流部との往来が盛んである。タタウ川、クムナ川間での流域を越えた往来は、プゥナンでは聞かれたものの、今回のインタビューではそれ以外は明らかにならなかった。今後、クムナ川、タタウ川のみならず、近隣の流域を含めた流域間の歴史の連鎖や動態を追っていく必要がある。

重層的なエスノスケープ

クムナ川、タタウ川流域はさまざまな人々の歴史が交差しており、そうした歴史の折り重なりによって現在のようなエスノスケープが形成された。本稿では、わかりやすさを重視するために民族集団ごとに分けて書いたが、人々の移動が盛んであることや他民族との婚姻が多いこともあり、民族集団ごとの区別あるいは範疇は極めて曖昧である。行政上はある民族のロングハウスと登録されていても、実際そこに住む人々のエスニシティは多様であり、ステレオタイプ的な語りはできない。集団と範疇、民族名に関する名付けと名乗り、アイデンティティと日々の行動など、さまざまな位相のなかで重層的なエスのスケープが形成されている。

また、クムナ川、タタウ川流域には、行政上は登録されていないタタウやルガット、ヴァイ・スガンといった人々が暮らしている。一つの村を構成する個々人の出自、歴史、宗教や言語などのバックグラウンドは様々である。そのため、イバンとプナンの混成集落やタタウとイバンの混成集落、プナンとヴァイ・スガンの混成集落、ルガットとブカタンの混成集落などもよくみられる。一見イバンなどのマジョリティのグループに同化しているように見えたり、外見上は政治的理由によりプナンに同化したように見えるイバンもいるが、その内情は必ずしも画一的ではなく、詳しく調べていくことが必要となる。

現在のクムナ川、タタウ川流域社会の景観は、そこに住む個々人の移動や生業活動の結果であり、その変化は、現在でも絶え間なく続いている。流域社会の一部を構成している、個々人の移動や社会関係などの背景を追っていくことは、流域社会全体を理解するうえで興味深い示唆を与えてくれる。

引用文献

石川　登 2010「 歴史のなかのバイオマス社会－熱帯流域社会の弾性と位相転移－ 」杉原薫，川井秀一，河野泰之，田辺明生編『地球圏・生命圏・人間圏―人類にとって生存基盤とは何か―』京都大学学術出版会 .

内掘基光 1994 「民族の消滅について―サラワク・ブキタンの状況をめぐって」黒田悦子編『民族の出会うかたち』朝日新聞社，pp.134-152.

祖田亮次・石川登（印刷中）「「狩猟採集民」と森林の商品化―ボルネオ北部プナンの戦略的資源利用」横山智編『資源と生業の地理学』海青社

Aichner, P. 1956. Adat Bungan. Sarawak Museum Journal 7: 476-477.

Bintulu District Office. 2011. *Profail Daerah Bintulu*.

Brooke, Charles, Vyner. 1907. Report on Rejang Dyak Affairs. Sarawak Gazette 37 (502): 245.

Buck, Q. A. 1887. Bintulu Monthly Report, June 1st. *Sarawak Gazette* No. 257: 107-109.

Cramb R. A. and Dian J. 1979. *A Social And Economic Survey of the Bintulu Extension Region* Report No. 8, Planning Divi sion, Department of Agriculture, Kuching Sarawak.

Department of Statistics Sarawak. 2010. *Year Book Statistics Sarawak*.

Freeman, J. D. 1955. *Iban Agriculture: A Report on the Shift ing Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak*. London: H.M. Stationery Office.

----1970. *Report on the Iban*. London: Athlone Press.

Kedit, P., M., Chang W. S. 2007. *The Peoples of the Planted Forest in Sarawak*. Forest Department Sarawak.

King, V. 1975. Stones and the Maloh of Indonesian West Borneo. *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society*. 48 (228-1): 104-119.

Linggang, F. 2008. *Early Iban Migration to Bintulu*. Retrieved Oct 17, 2012.

Low, H., B. 1882. Journal of a Trip up the Rejang. *Sarawak Gazette* (1st July) 7 (189): 52-54.

Martin, P.W. and Sercombe P.G. 1992. The Penan of Brunei: Patterns of linguistic interaction. Martin P.W.(ed) Shifting Patterns of Language Use in Borneo - The Borneo Research Council Proceedings Series Vol.3 165-178.

Metcalf, P. A. 1976. Who are the Berawan? *Oceania* 47: 85-105.

Morris, H. S. 1976. The Coastal Melanau. In Victor, King. (ed.) *Essay on Borneo Societies*. Oxford; Oxford University Press.

Needham, R. 1965. Death-Names and Solidarity in Penan Society. *Bijdragen* 121 : 58-73.

Nicolaisen, I. 1976. Form and Function of Punan Bah Ethno-historical Tradition. *Sarawak Museum Journal* 24 (45): 63-95.

----. 1977. The Dynamics of Ethnic Classification: A Case Study of the Punan Bah in Sarawak. Folk 19: 183-200.

Owen, D, A. 1905. Bintulu Annual Report (February 1905). *Sarawak Gazette* 35 (471): 81.

Pringle, R. 1970. *Rajahs and Rebels: The Ibans of Sarawak under Brooke Rule, 1841-1941*. London: Macmillan.

Rousseau, J. 1990. *Central Borneo: Ethnic Identity and Social Life in a Stratified Society*. Oxford: Clarendon press.

Sandin, B. 1967. *The Sea Dayaks of Borneo before White Rajah Rule*. London: Macmillan.

----. 1968. The Bukitans - II. *Sarawak Museum Journal* 16: 111-121.

----. 1970. The Tatau People of the Kakus and Anap Rivers, Fourth Division, Sarawak. *Sarawak Museum Journal* 18: 162-164.

Sarawak Gazette 1879. Bintulu. May 23th, No. 153: 31- 40

Sarawak Civil Service. 1947. *A report on the 1947 population census, Sarawak and Brunei*.

--- 1960. *Report on the census of population, 1960*: Superinten dent of Census, Sarawak.

Sercombe, P. 1996. Ethno-linguistic change among the Penan of Brunei; Some initial observations. In: Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde 152 (1996), no: 2, Leiden, 257-274.

Tatau District Office. 2011. *Profail Daerah Tatau*.

脚注

[1] ビンツル省公式ウェブサイト*Laman Rasmi Bahagian Residen Bintulu*による

[2] 2011年8月17日 Uma Anyieの Wan Imang 氏へのインタビューによる。

[3] ブンガン教（Adat Bungan）は1950年代よりボルネオ中央部で興隆した、在来信仰にキリスト教的な要素を合わせた改革宗教である。古い慣習により妨げられていた農業効率を上げるために誕生した。これによりアニミズムがより合理的に解釈され、儀礼によってタブーを無視できるようになった（Aichner1956）。一時期カヤン、クニャを中心に信者が多かったが、現在ではキリスト
教に改宗する人が多い。

[4] 上記の注2に同じ

[5] 2011年8月18日 Uma Lasahの Mering Tuva 氏へのインタビューによる。

[6] 2011年8月26日 Penghulu Sanok Magai 氏へのインタビューによる。

[7] なおこのプゥナンは、一時期プナンとスガンの奴隷を所有していた（Cramb 1979）。

[8] 実際には「奴隷」という意味でなく、「弟/妹」と呼ばれる（Kedit and Chang 2007）。

[9] Bekatan Ngemahはカノウィットに住んでいたが、1945年以降イバンに同化して、今は全くいないという（Sandin 1968）。

[10] 2011年8月25日 Rh. Bandaの Gaing Ungat 氏へのインタビューによる。

[11] 2011年8月27日Rh. KanyanのKanyan Abok氏へのインタビューによる。

[12] 2011年8月19日 Rh. Jusongの Sintan Juti 氏へのインタビューによる。

[13] "*The history of Baee Segaan*" (2010) による。

[14] Nicolaisenによると、プゥナンがパンダンに住み始めたころプゥナンはプナンのことをラバン Laveangと呼んでいた。しかし、これらの人々がマレーやムラナウと混ざり、ムスリムになるにつれてスガアン（Segaan）と呼ぶようになった（Nicolaisen 1976）。

[15] 2011年8月18日 Uma Lasahの Mering Tuva 氏のインタビューによる。

[16] 2011年8月25日Rh. JalongのDelila Sekudau氏へのインタビューによる。

[17] 2011年8月25日Rh. JalongのDelila Sekudau氏へのインタビューによる。

[18] 2011年8月26日タタウ街にて Anyai（Meng Teng Yiew）氏へのインタビューによる。

[19] 2011年8月23日 Rh. Mawangの Mawang anak Mat 氏へのインタビューによる。

野生動物の生息状況と人々の狩猟調査 I
ミリ - ビンツル道路からサマラカンを中心に

加藤 裕美（京都大学 東南アジア研究所）
鮫島 弘光（京都大学 東南アジア研究所）

2012 年 7 月 1 日～ 7 月 3 日にかけて、加藤裕美・鮫島弘光でイノシシなどの動物の狩猟調査と、村落での生業調査を行った。調査目的は、天然林やプランテーションなど、異なるランドスケープにおける野生動物の生息状況と人々の狩猟活動を明らかにすることである。

調査対象は 11 村（地図参照）で、4 村でイノシシ のサンプリングの依頼をし、実際にイノシシの毛サンプルを1つ採取した。

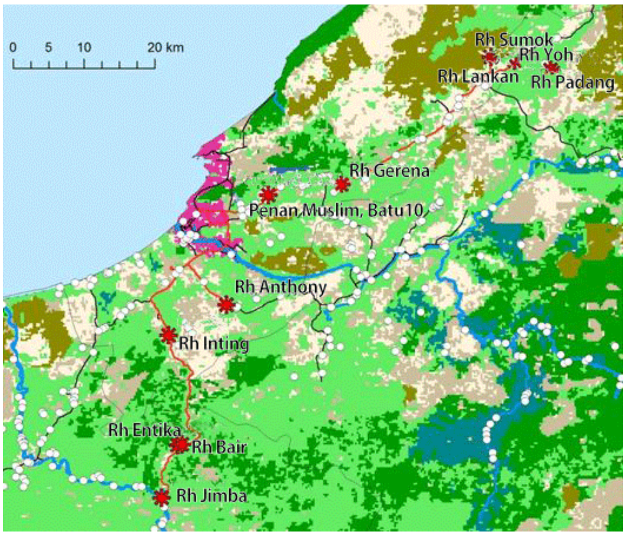
調査対象：

1. ミリ ― ビンツル道路沿い 6 村
2. サマラカン道路沿い、4 村
3. Sg. Silas のツバメハウスを建ている村 1 村
   ・イバン 9 村
   ・プナン（ムスリム）2 村

調査方法：

村長や村人に 1-2 時間程度のインタビューを行い、村での生業の様子、おもに狩猟活動について訊ねた。

またヒゲイノシシ、スイロク、ホエジカ、マメジカなどの主要な動物の年間狩猟頭数とその生息状況についてインタビューを行った。



図： 調査対象の村

調査報告

2012 年 7 月 1 日（日）

一日目は、ミリ ― ビンツル道路沿いの村を訪れた。まず、ミリ - ビンツル道路沿いにある、Kampung Penan Muslim, Batu 10 にてインタビューをする。村の門も立派で個別住居も立派、公民館やモスク、運動場などもあり、村には Wifi が通っている。たまたま、村では、Karnival Gagaw というイベントを開催中で、村長は忙しそうだったが、日本から来たというと親切に応対してくれる。フットサル大会の他、警察、クリニック、IC 作成、Wifi 事業など政府による様々な展示があり、1 ブースごとに紹介をしてもらう。自分たちの村が発展していることに誇り思っていると感じられた。村での主な生業調査（稲作、アブラヤシ栽培、賃金労働など）を行い、狩猟についてもインタビューをする。しかし、あまり活発には狩猟を行っておらず、調査票の依頼はしなかった。その後村の歴史や他のプナン・ムスリムの村との関係や他民族との混住状況についてインタビューをする。

2 村目に、ミリ - ビンツル道路をさらに北進し、イバンの村 Rh. Garena でインタビューを行う。ロングハウスは建設中である。現在この村では土地問題が深刻なようで、そのことについて村長はしばらく熱く語る。その後、村全体での生業について、稲作、アブラヤシ栽培状況、賃金労働の状況などのインタビューを行う。狩猟は、まだ活発に行っており、猟師もたくさんいるようであった。狩猟方法、範囲、販売価格などについても聞く。調査票への記入と毛の採集を依頼しようとしたが、狩猟場所から直接シンパン・スバウに肉を売りに行ってしまうことが多いとのことで依頼はしなかった。この周辺の村では同じように盛んに狩猟をしているらしいとのことで、周辺の別の村に依頼をすることを検討する。

Similajau Cafe´ で昼食をとり、3 村目に、サイムダービー社のアブラヤシ・プランテーションのすぐ隣にある、Rh. Sumok を訪れる。イバンの村である。ロングハウスを建設中で仮のロングハウス（dampa）に住む村長にインタビューを行う。村全体の生業活動として、稲作やゴム採集、賃金労働について聞き取りを行い、中心的な生業であるアブラヤシの栽培状況についてはやや詳しくインタビューを行う。狩猟についてもインタビューをするがほとんど行っておらず、調査票の依頼はしなかった。

4 村目に、シンパン・バクンを越え、ミリ - ビンツル道路をさらに進み、Rh. Padang というイバンの村を訪れる。

写真 1: ヒゲイノシシのあご骨のスケールを測る

村長が不在のため、副村長にインタビューを行う。村全体の生業活動について聞く。この村は、アブラヤシ栽培以外にも、コショウ栽培や野菜栽培が盛んであったが、稲作はおこなっていない。村の裏には保存林があるため、そこでの狩猟がよくおこなわれるようである。狩猟方法やあらかじめ選んだ 30 種ぐらいの動物の生息状況について詳しいインタビューを行う。副村長に調査票とイノシシの毛採集袋を渡してくる。

2012 年 7 月 2 日（月）

2 日目は、サマラカン道路沿いにある村をアナップ川に出るまで訪れた。最初（5 村目）に、Rh. Inting というイバンのロングハウスでインタビューをする。Segan 川から移住したため、建設中であった。生業のインタビューを始めると、アブラヤシ販売で工場に騙されたという話が持ち出され、そのままアブラヤシ栽培、稲作、賃金労働などについて、聞き取りを行う。ここでも NCR 問題が明確化しているようで、そのことについて　村長の話を聞く。稲作やアブラヤシ栽培は盛んであったが、狩猟は盛んではなかったので、調査票の依頼等はおこなわなかった。 6 村目に、サマラカン道路をさらに南下し、イバンの Rh. Entika を訪れる。村人はみな畑に行って不在で、たまたま昼食に帰ってきた村長の奥さんにインタビューを行う。この村は、以前は Anap 川沿いに住んでいたが、Borneo Pulp and Paper の工場予定地となったため、道路沿いに移住してきた。周囲には同じような村が 3 村ある。土地が足りていないのが問題とのことであった。村全体の生業の状況についてインタビューを行う。都市での賃金労働が盛んで、狩猟はほとんど行っていなかった。

7 村目に、サマラカン道路をさらに進み、イバンの Rh. Bair を訪れる。これまでの村に比べて、村にいる人の数がはるかに多く、村長以外の人も積極的に話に答えてくれる。パルプ工場建設に伴う移住については、土地不足、水不足が顕在化しており、不満が聞かれた。村全体の生業については、焼畑、アブラヤシ栽培が盛んな村で、町で仕事をしている人は少数であった。狩猟については、猟師が何人かいるようで、詳しい調査を行う。特定の種の生息状況について聞き、村長に調査票への記入を依頼し、サンプル袋を渡してくる。

8 村目に、サマラカン道路の最終地点にある、Rh. Jimbai を訪れる。アナップ川沿いにあるイバンの村である。非常に長いロングハウスであるが、町での賃労が盛んで、普段の在村者は少ない。村全体の生業としては、稲作、アブラヤシ栽培とも、農業全般があまり盛んではなく、漁業を少し行っている。狩猟についても聞き取りを行う。狩猟も盛んではないが、細々と行っていた。大型動物よりもマメジカなどの小型種の方を頻繁に狩猟するようである。動物の詳しい生息状況についてインタビューを行う。

Niah Cafe´ で遅めの昼食をとり、今度は、スバウ道路へ入る。9 村目に、基盤 S でツバメハウスの建設を行っている、Rh. Anthony というイバンのロングハウスを訪れる。この村は Nanas Silas といわれるパイナップルの有名な産地で、他にもキャッサバなどの野菜の栽培とビンツルでの販売が盛んな村である。アブラヤシ栽培も盛んであったが、稲作を含め他の農業はあまり盛んではない。野菜栽培の話を中心に聞く。狩猟についてもインタビューを行うが、現在ではわずかながら行っているようであった。

2012 年 7 月 3 日（火）

初めに、シンパン・スバウでイノシシを売っていた Rh. Muking の男性に聞き取りを行う。とれたイノシシの場所、方法についてインタビューをする。イノシシを獲るのはお安い御用ということで、イノシシの毛の採集と調査票への記入を依頼する。

10 村目に、ラバン川上流にある、Rh. Yoh というプナン・ムスリムの村を訪れる。遊動時代の生活、移動の歴史、周辺のプナンの村との往来について詳細な話を聞く。その後、村全体の生業活動についてインタビューを行う。アブラヤシ栽培は行っているが、稲作は全く行っておらず、そのほかの農業もあまり盛んではない。狩猟についても盛んではなかったので、村の歴史や他のプナンとの関係について詳しくインタビューをおこなう。

最後の 11 村目に Rh. Limai というイバンのロングハウスを訪れる。Rh. Yoh の少し手前にあるロングハウスである。ロングハウスが長いので道を挟んで 2 棟に分かれている。村長は、商店を経営しており、品物の搬入で忙しそうだったので、少し待ってからインタビューを進める。この周辺では最初にスカランから入植した村であり、周辺にあるイバンの村は、この村から別れて新しくできた村である。村の歴史や、村全体の生業についてインタビューを行う。稲作、アブラヤシ栽培共に半数ぐらいの世帯が行っていた。狩猟についても比較的盛んに行っており、インタビューを行う。狩猟方法や特定の動物の生息状況についてインタビューを行う。イノシシ以外にもブタオザルの狩猟が盛んなようである。Rh. Yoh で獲れたブタオザルもイバンの村で売ると言っていた。今回は、ミリービンツル道路沿い、サマラカンを中心に調査を行った。より植生の異なる村での状況を明らかにするために、2012 年 8 月にも追加調査行う予定である。

写真 2: 生業活動や狩猟についてのインタビュー

野生動物の生息状況と人々の狩猟調査 Ⅱ タタウ川・カクス川を中心に

加藤 裕美（京都大学 東南アジア研究所）
鮫島 弘光（京都大学 東南アジア研究所）

2012 年 8 月 7 日から 8 月 9 日にかけて、加藤裕美と鮫島弘光で 2 回目の狩猟調査を行った。

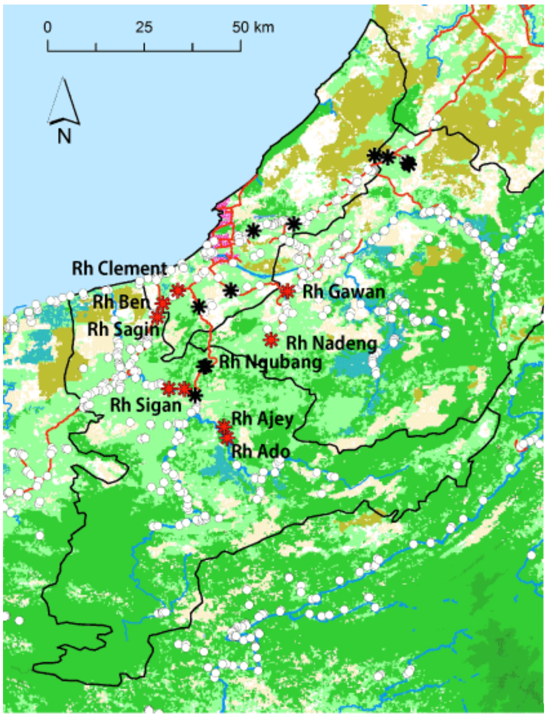
前回のミリ — ビンツル道路沿い、サマラカン道路沿い、Sg. Silas に加え、今回はタタウ — ビンツル道路沿いの 3 村、アナップ川下流の 2 村、カクス川の 2 村、スバウ川沿いの 2 村、合計 9 村で聞き取り調査を行った。

また、Rh. Arjey（Kakus 川）、Rh. Sigan（Tatau 川）、Rh. Gawan（Sebauh 川）の 3 村で狩猟記録シートへの記入とイノシシの毛のサンプリングを依頼した。

調査村の位置は下図の通りです。

調査対象：

1. タタウ — ビンツル道路沿い 3 村
2. アナップ川下流 2 村
3. カクス川 2 村
4. スバウ川 2 村
   ・イバン 7 村
   ・プナン 2 村



図：調査村の位置（赤＊は今回の調査村,黒＊は前回 7 月の調査村）

調査報告

2012 年 8 月 7 日（火）

まず、タタウ — ビンツル道路沿いの二次林とアカシア林が優占する地域を訪れる。

1 村目に、Rh. Clement Banyang, を訪問した。この村を含めた以下の 3 村は二次林とオイルパーム・プランテーションとアカシア・プランテーションが混在する地域に位置している。日帰りでビンツルへ通える圏内に位置し、町で働く人が多いものの在村率は高い。農業全般は盛んでなく、狩猟もほとんどおこなっていない。

2 村目に同じくタタウ — ビンツル道路沿いの Rh. Ben ak Tedong を訪れる。この村でも村外労働が非常に盛んで、特にアブラヤシ・プランテーションでの就労が多い。昼間はほとんど人がいないため、農業も狩猟も盛んではなかった。バクンの方からイノシシを売りに来るとのことであった。

3 村目に Rh Sagin ak Jamir を訪れる。ここは在村率が非常に高く、空き家はない。カノウィットのラナン出身のイバンである。村長がおり、高齢者も多く、歴史の話に花が咲く。ルンタップの乱のことも語られる。稲作は全戸でしているものの、狩猟は盛んではなかった。この後、タタウの町に行き、食料品などを買いルガットに少し会い 13:30 のエクスプレス・ボートに乗る。

4 村目にタタウ川上流のカクス川沿いにある Rh. Ajey ak Kenai へ行った。タタウの町から Rh. Ajey までの運賃は RM18 で 1 時間半で着く。川と直角の向きに 2 棟のロングハウスが立つ。ビンツルからサマラカン経由の道路も通じており、村には車やバイクが目立つ。村長の Ajey 氏にジェラロンやパンダンのプナンとの婚姻関係、他民族との婚姻関係について聞き、続いて生業全般についてインタビューをする。最も多い生業が農業で、続いて村外労働も盛んである。数年前にゴムの値段が高かった時は、伐採キャンプで働いている人も村に戻ってきてゴム採集をしたという。アブラヤシは最近植え始めたばかりだが、将来的には全世帯で植える予定である。村周辺の植生や SPF のアカシア・プランテーションとの問題、また狩猟についても聞き取りをする。この村ではスイロクを禁忌としている人が多かったことが印象的であった。狩猟記録シートへの記録と毛のサンプリングを依頼する。

その後、村人の船で上流まで送ってもらい、5 村目に Rh. Ado ak Bilong を訪れる。Rh. Ajey から 5 馬力の船で 25 分であった。2008 年の火災でロングハウスが焼

写真 3: 動物の生息状況についてのインタビュー

失し、現在は個別住居にすむ。以前はこの辺りで一番長いロングハウスだった。村の前に半分焼けた keliring（墓）が立つ。村長も副村長も不在で、ちょうど帰村した Penghulu Sanok 氏の家にお世話になる。Penghulu の父、Magai Lepit 氏（先代の Penghulu）に、昔のカクス川とバー川間の徒歩での行き来や、Bukit Bekuyat でのツバメの巣採集の 話を聞く。夕食後、現在の村での生業について Penghulu Sanok 氏に話を聞く。この村では 7 割ほどが在村しており、農業を行っている。労働者を雇ってゴム採集をする人もいる。イバンが入植した当時の歴史やイバンとプゥナンの婚姻関係についても話を聞く。その後、狩猟について詳しいインタビューをする。

2012 年 08 月 08 日（水）

朝、村の中を散歩する。Penghulu Sanok 氏をはじめ多くの人は、畑仕事に出かける。家の軒先で雑談をしていた、3 人の男性にインタビューをする。ミツバチの話、ツバメの巣採集について話を聞き、狩猟については種ごとの詳しいインタビューをする。昼食をごちそうになり、11:20 のタタウ行きのエクスプレス・ボートに乗り下流のイバンの村を目指す。

約 1 時間で 6 村目 Rh. Ngubang ak Ajum に到着する（運賃 RM12）。村長にインタビューをする。周辺の植生の状況や村全体の生業活動について聞く。村で農業をする人と村外労働者は半々ぐらいである。狩猟については全く動物が獲れていなかったので、詳しいインタビューはしなかった。この村からタタウまでロングボートで RM12 である。対岸からビンツルへ車のトランスポートもある。村人に、下流の Rh. Sigan まで 15 馬力の船で送ってもらう。

7 村目に Rh. Sigan ak Rengi を訪れる。村の南北には、アカシア・プランテーションやオイルパーム・プランテーションがある。2001 年 9 月 10 日まで 80 世帯あり、この地域で一番長いロングハウスだったが、火事で焼失してからは 4 村に分かれた。村で空き家はなく、男性は伐採会社で働いている人が多いものの、女性が在村をして稲作などの農業をしている。アブラヤシ栽培は始めたばかりである。この村の近くではラタンもまだたくさん残っており、多くの女性がラタンでカゴを作っていた。狩猟については非常に盛んで網で狩猟をすることもある。上流のプゥナンとここのイバンでは狩猟方法が異なり、プゥナンは車を使って狩猟に行くが、ここのイバンはまだ昔ながらに徒歩で狩猟に行くという。村長の娘さんに狩猟記録シートへの記入とサンプルの採集を依頼する。この地域の人たちは中国人本土から来た男性「チナメン」を大変警戒している。ロングハウスで強引に物を買わせようとしたり、騙されたりしたことがあるからだ。ここからタタウまで車で RM50 であるが、偶然通った学校の先生の車でタタウまで無料で送ってもらう。

2012 年 08 月 09 日（木）

クムナ川南回りの道でスバウ川流域に至り、この流域の村をめぐる（1 日チャーター RM200 ＋ガソリン代）。はじめに、Rh Sapit ak Luang へ寄り、この周辺でよく狩猟をする村の情報を得た。8 村目に、よく狩猟をしている村ではないがアカシア林近くの Rh.Nadeng ak Agat へ行く。村長は畑に行っており不在だった。村外労働が盛んな村で、農業は全体的に盛んではない。アブラヤシについては近くに住んでいるカヤンに実を運搬してもらっている。村の周囲はアカシア林が多く、広い森がないため、狩猟は盛んでなかった。

写真 4: 調査中に獲れたマメジカのスープをごちそうになる

9村目にRh Gawan ak Bandauを訪れる。良く狩猟をすると教えてもらった村である。村長がおり、彼にインタビューをする。この周辺の村々はTa Ann社とアブラヤシ栽培のジョイント・ベンチャーに参加している。稲作は盛んで、小農アブラヤシ栽培もしており、在村率が高い。アブラヤシの実は、3時間かけて価格の良いKeresaへ売っている。Keresaが周辺の小農に施している援助についても（多少誇張されているが）よく知っている。近くに水源林や湿地林があり、そこに動物が多く生息しているとのことであった。狩猟が非常に盛んであったため、村長に狩猟記録シートと毛のサンプルを依頼してくる。

まとめ

2012年7月と8月の調査では、植生の異なる合計20村にて聞き取り調査を行った。村での狩猟の状況や生業の状況、また狩猟頭数については地域ごとにかなりの差異が見られた。今後、村での狩猟頭数が、周辺の植生や他の生業とどのように関わっているのか分析を進めて行く予定である。

関連活動記録

第三回商品連鎖研究会

（商品連鎖研究会ほかとの共催）
2013 年 1 月 13 日
（京都大学 東南アジア研究所にて開催）

共同利用・共同研究拠点「熱帯環境からみた商品連鎖の時空間的分析――グローバルな分野横断型研究の創出に向けて」（商品連鎖研究会）他との共催で、商品連鎖研究会を開催しました。

今回は、歴史的な観点から熱帯の森林産物がどのように交易されてきたのかについて、多様な報告がなされました。

本科研プロジェクトからは、杉原薫、太田淳、小林篤史の各氏が発表を行いました。

プログラムは以下の通りです。

発表者・テーマ

杉原 薫（東京大学）
「東南アジア第一次産品輸出経済の発展－２世紀の歩みとサラワク－」
コメンテーター：城山 智子 氏（一橋大学）

太田 淳（広島大学）
「西カリマンタンにおける移民と貿易、1760-1820 年」
コメンテーター：山田 協太 氏（京都大学）

小林 篤史（京都大学大学院）
「シンガポール貿易の成長と銀貨流通の拡大、1830-73 年」
コメンテーター：西村 雄志 氏（関西大学）

柿崎 一郎（横浜市立大学）
「仏印の外港～後背地関係の解明に向けて―滇越鉄道を中心に―」
コメンテーター：武内 房司 氏（学習院大学）

写真：プロジェクトメンバーも多数参加した研究会の模様

2012年度全体集会

（第四回商品連鎖研究会と共催）
2013 年 1 月 26-27 日
（京都大学 東南アジア研究所にて開催）

2012 年度の年度末の前に全体集会を開催いたしました。

プロジェクトのメンバー各自がそれぞれの研究発表を行い、またそれと同時にこれまでの成果の整理と今後の可能性並びに向き合うべき課題についても十分な時間を取って議論を行いました。

2013 年度の本プロジェクト全体の課題と各自の調査における課題が、議論を通じてようやく輪郭を持った形で見え始め、結果として非常に有意義な 2 日間となりました。

プログラムは以下の通りです。

発表者・テーマ

<u>一日目（1/26）</u>

石川 登
「基盤 S 全体集会（これまでのまとめ）」

杉原 薫
「熱帯バイオマス社会の基本構造―4 つの動機をめぐって」

市川 昌広
「ビンツル市の発展史」

太田 淳
「西カリマンタンにおける内陸支配と貿易の変容―1820-1850 年代」

小林 篤史
「20世紀前半のサラワクにおける法制度改革・信用の改善・貿易成長」

津上 誠
「Asapのカヤン系諸民族―リロケーション(1998)後の生存戦略」

奥野 克巳
「『狩猟採集民プナン』再検討に向けて」

石川 登
「アブラヤシ小農と生態保全の融合モデル」

写真：プロジェクトの進捗状況について解説する石川／鮫島両氏

__二日目（1/27）__

石川 登
「Smallholder' s Oilpalm Cultivation with High Quality Nature Matrices 」

Jason Hon
「Diversity of wildlife inside an oil palm plantation-forest mosaics in Bintulu, Sarawak, Malaysia: A preliminary assessment of camera trapping activity」

祖田 亮次／加藤 裕美
「ビンツル・トゥバオにおけるアブラヤシ小農栽培の動向―小農 - 企業関係、RSPO 認証、都市 - 農村関係」

加藤 裕美／鮫島 弘光
「異なるランドスケープにおける人々の狩猟活動」

鮫島 弘光／ Jason Hon ／小泉 都／ Malcom Demies
「Anap-Muput 森林管理区の生物多様性：①樹木バイオマス②樹木多様性③哺乳類多様性」

生方 史数
「サラワクのアブラヤシ生産における企業と小農―費用と収益の分析から」

定道 有頂
「アブラヤシ栽培の温室効果ガス排出量の分析―小農とプランテーション」

藤田 素子
「ツバメ養殖ハウスのアナツバメの採餌特性」

市川 哲
「近年のサラワクにおけるツバメの巣ビジネスとその特徴―自然環境利用と高級食材交易」

佐久間 香子
「(人類学的に) ツバメの巣の何が面白いのか？―バラム河流域およびムルを事例に」

甲山 治
「河川流出・大気陸面」

福島 慶太郎／徳地 直子／鮫島 弘光／甲山 治
「Kemena, Tatau 流域の水質―2011, 2012 年の結果からと 2013 年の課題」

＜総合討論＞

写真：久しぶりにメンバーが一堂に会し、議論が弾んだ

第四回商品連鎖研究会

（商品連鎖研究会ほかとの共催）
2013 年 2 月 2 日
（名古屋大学 環境総合館にて開催）

共同利用・共同研究拠点「熱帯環境からみた商品連鎖の時空間的分析――グローバルな分野横断型研究の創出に向けて」他との共催で、商品連鎖研究会を開催しました。

今回は、「リソース・チェーン」という概念で東南アジア大陸部の土地・資源利用と商品化、およびその流れを研究している横山智さんのプロジェクトと合同開催ということで、名古屋大学を会場に行いました。

辻村英之氏のご発表は、私たちにとっては馴染みの薄いアフリカのコーヒーをめぐるフードシステムについて、詳しく解説・報告するものでした。

本プロジェクトからは、祖田 亮次氏が商品連鎖研究会の趣旨説明を行ったほか、市川 哲氏、小林 篤史氏による報告が行われました。

発表者・テーマ

祖田 亮次（大阪市立大学 文学研究科）
「趣旨説明 1」

横山 智（名古屋大学大学院 環境学研究科）
「趣旨説明 2」

辻村 英之（京都大学 農学研究科）
「『キリマンジャロ』のフードシステム―フェア･トレードの役割」

市川 哲（立教大学 観光学部）
「サラワク域内／域外におけるツバメの巣ビジネスおよびトレードの概況―民族間関係を中心に」

小林 篤史（京都大学 アジア・アフリカ地域研究科）
「ボルネオ・サラワク地域経済の変容と世界経済への統合―1870-1940 年」

写真：今回の研究会の趣旨を解説する横山氏

メンバー研究会（異分野研究会）

2013年4月12日
（京都大学 東南アジア研究所にて開催）

本年度は、河川の水質研究・流況研究と、流域社会の生業研究・移動研究などをむすびつけるために、魚類生態学的研究と河川地形学的な研究を含めて進めていくことになりました。

また、植生研究についても、これまで行ってきた択伐地区での調査に加えて、集落の保存林・二次林での調査を行うことで、流域社会の生業活動とどのような相互関係を持っているのかを明らかにしていきます。これらの研究を進めるために、新たなメンバーに加わっていただきました。

今回の研究会では、新たにプロジェクトに参加していただく研究者の皆さんに、これまでに行って来られた研究の内容を各自の言葉で他のメンバーに紹介していただきました。

同時に、サラワクにおいて共同研究を進めるための具体的な方法やスケジュールについて、古参のメンバーと意見を交換し検討いたしました。

今回ご発表いただいたのは、以下の方々です。

発表者・テーマ

竹内 やよい（国立環境学研究所）
「プラウが景観レベルでの生物多様性に果たす役割」

鹿野 雄一（九州大学 工学部）
「東南アジアおよびサラワクの淡水魚相」

目代 邦康（公益財団法人 自然保護助成基金）
「サラワクの河川と地形：これまでの調査
（2010/2、2012/2、2013/3）の感想と今後の展望」

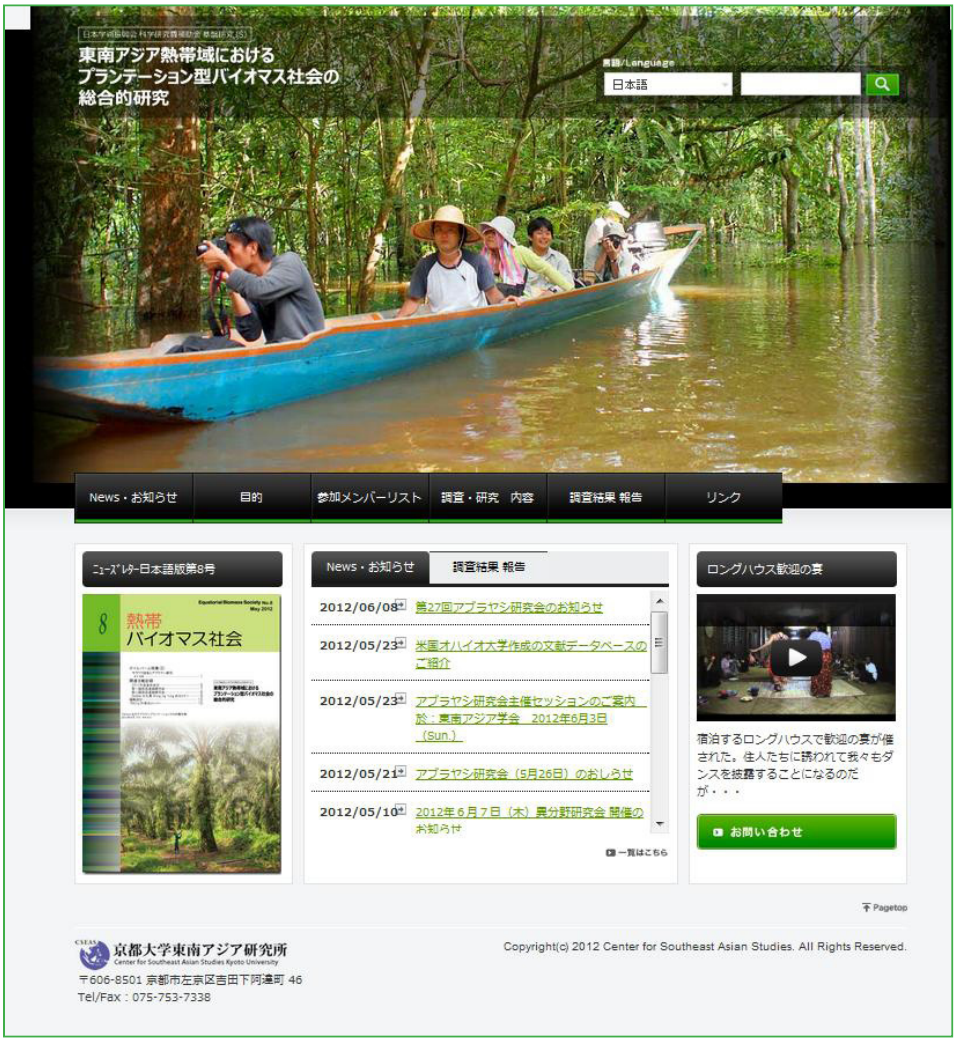
写真：メンバーからの質問に答える竹内氏

写真：豊富な写真資料を使って魚類と河川の関係を披露する鹿野氏

写真：地形学の視点からサラワクの河川の特徴をメンバーに解説する目代氏

本プロジェクトのホームページのご紹介

http://biomasssociety.org



当プロジェクトのホームーページを開設しております。

- メンバーによる調査報告
- 講演会やワークショップ等、関連活動の紹介
- ニューズレターのバックナンバー（英語版もあります）
- 細心の活動などについても随時お知らせしております。

是非一度、ご覧ください。

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川　登	人類学	京都大学 東南アジア研究所
研究分担者	祖田　亮次	地理学	大阪市立大学 文学研究科
	河野　泰之	自然資源管理	京都大学 東南アジア研究所
	杉原　薫	グローバル・ヒストリー	政策研究大学院大学
	水野　広祐	農業経済学	京都大学 東南アジア研究所
	徳地　直子	森林生態保全学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	内堀　基光	文化人類学	放送大学 教養学部
連携研究者	鮫島　弘光	生態学	京都大学 東南アジア研究所
	藤田　素子	鳥類生態学	京都大学 東南アジア研究所
	甲山　治	水文学	京都大学 東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	津上　誠	文化人類学	東北学院大学 教養学部
	奥野　克巳	文化人類学	桜美林大学 リベラルアーツ学群
	市川　昌広	東南アジア地域研究	高知大学 農学部
	小泉　都	生態人類学	京都大学 農学研究科
	生方　史数	天然資源経済学	岡山大学 大学院環境生命科学研究科
	市川　哲	文化人類学	立教大学 観光学部
協力者	定道　有頂	ライフサイクル・アセスメント	日本エヌ・ユー・エス株式会社（JANUS）
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学 東南アジア研究所
	田中　耕司	東南アジア地域研究	京都大学 研究国際部学術研究支援室
	佐久間　香子	文化人類学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	小林　篤史	歴史学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学 地域研究統合情報センター
	内藤　大輔	地域研究	総合地球環境学研究所
	Jason Hon	動物生態学	京都大学 地球環境学堂
	加藤　裕美	文化人類学	京都大学 東南アジア研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak（UNIMAS）
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak（UNIMAS）
	Abdul Rashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak（UNIMAS）
	Lee Hua Seng	森林社会学	元 Sarawak Timber Association
	太田　淳	歴史学	広島大学 文学研究科
	鹿野　雄一	河川生態学	九州大学 工学部
	竹内　やよい	生態学	国立環境学研究所
	目代　邦康	自然地理学	公益財団法人 自然保護助成基金
	大竹　真二	映像人類学	モイ
	木谷　公哉	情報学	京都大学 東南アジア研究所
事務局	田中　園子	総務・会計担当	京都大学 東南アジア研究所
	中根　英紀	情報管理・発信担当	京都大学 東南アジア研究所

編集後記：

本ニューズレターはプロジェクトメンバー以外の方にも配信いたしております。

配信を希望される方は事務局：（nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

またイベントのお知らせ、過去のニューズレターなどは当プロジェクトのホームページ：（http://biomasssociety.org/）で見ることができますので、そちらの方もご参照ください。

（鮫島弘光）

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX:075-753-7338
http://biomasssociety.org
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 鮫島 弘光 中根 英紀（基盤Ｓ事務局）

タタウ川中流の山々
2012 年8月（写真：加藤 裕美）